

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	加 藤 聡 子
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">A Relational Mentoring Program for Language Learning Advisors: The Effects of Life Story Interviews, Collaborative Reflection, and Reverse-Mentoring</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教授 柳瀬 陽介</p> <p>審査委員 教授 小野 章</p> <p>審査委員 教授 曾余田 浩史</p> <p>審査委員 教授 深澤 清治</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、語学学習アドバイザー（以下、アドバイザー）を対象とし、2層型継続教育の観点から、相互成長支援メンタリングを導入し、それによりメンターとメンティ（すなわちアドバイザーに継続教育を施す者と継続教育を受けるアドバイザー）の間での相互成長が促進されるかを検討したものである。</p> <p>2層型継続教育とは、2年以上の経験を積んだアドバイザーのさらなる力量形成のために行われる継続教育の一種である。従来からの継続教育は、受講者であるアドバイザーよりも経験年数の長いアドバイザーが講師となっていくものであるが、この方法だと後者のアドバイザーの継続教育のためにはさらに経験年数の長い上位層のアドバイザーが必要となる。そうなるとうとうも継続教育が多層化し、上級アドバイザーになればなるほど自らの力量を上げる機会を得ることが困難になってくる。そこで本論文は、上位層のアドバイザーが下位層のアドバイザーを一方向的に育てるのではなく、上位層と下位層のアドバイザーが相互成長できるような2層型の継続教育を考案した。</p> <p>この2層型継続教育では、相互成長支援メンタリングを行うが、その際には、メンターとメンティの相互成長を促進するために、ライフストーリー・インタビュー、協働的リフレクション、リバース・メンタリングの3つの仕掛けを導入した。ライフストーリー・インタビューは、メンターとメンティの関係性を構築することを目的としたもので、具体的な手段としては参加者それぞれのこれまでの人生を一枚の絵（もしくは図）に象徴的（もしくは縮約的）に表現するピクチャー・オブ・ライフが使われた。協働的リフレクションは、問題の捉えなおしをもたらすため、もしくは全体を振り返るために導入され、メンターとメンティがセッション終了後ごとにそれぞれに書いていた振り返りを相互に読み合った。リバース・メンタリングは視点の転換をもたらすために導入され、それまでメンターだった者がメンティに、メンティだった者がメンターになることによってそれぞれのアドバイザーとしての力量形成を図った。</p> <p>プログラムは一年半にわたるもので、1名の上位アドバイザー（論文著者。アドバイザー歴は10年）がメンターになり、メンティとなる5名のアドバイザー（アドバイザー歴</p>			

は2～6年)にそれぞれ全7回のセッションを行った(一つのセッションは一時間から一時間半程度)。その成果を検証したところ、3つの仕掛けのどれにおいても、またプログラム全体を通してメンターとメンティの相互成長が見られ、2層型継続教育としての相互成長支援メンタリングが成功したことが確認された。

論文の構成は、次のとおりである。

第1章では、序論としてアドバイザーとアドバイジングの基本理念である学習者の自律性およびリフレクティブ・ダイアログについて簡単に定義した上で、現状のアドバイザー継続教育では上位層のアドバイザーが継続教育を受けることが困難になっていることを指摘した。

第2章では、自律性とアドバイジング、リフレクション、メンタリング、ライフストーリーといった論点での先行研究を概括し、継続教育のためのメンタリングの中でも、相互成長支援メンタリングが効果的であることを示した。さらに、その相互成長支援メンタリングをより効果的にするには、ライフストーリー・インタビュー、協働的リフレクション、リバース・メンタリングの3つの仕掛けを体系的に導入することが望ましいが、そのような試みを行った研究は存在しないことを確認した。

第3章では、研究デザインと方法を示した。「ある程度の経験をもつアドバイザーのための継続教育として設計された相互成長支援メンタリング・プログラムにおいて、メンターおよびメンティの両者の相互成長はいかにして促進されるのか」というリサーチクエスチョンを設定し、その相互成長支援メンタリング・プログラムを操作的に定義した。さらに研究協力者とデータ分析の方法についてもまとめた。

第4章の結果と考察では3つの仕掛け(そのうち協働的リフレクションは2回に分けて行われた)とプログラム全体における成果を分析し考察を加えた。

第5章の結論では本論文全体を総括し、本論文の限界も具体的に示した上で、新たに浮かび上がってきた論点を"well-being"の概念から今後研究してゆくことが重要であることを指摘した。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. 現在進展が目覚ましい語学学習アドバイジング・語学教育アドバイザーの基礎概念である自律性、リフレクション、メンタリング、ライフストーリーといった論点について文献研究を行った上で得た理論整理に基づいて、3つの仕掛けを伴う相互成長支援メンタリング・プログラムを具体的に設計し、それを実施して、その成果を実証的に示すことができたこと。
2. 相互成長支援メンタリングの考え方を2層型の継続教育という形に取り入れることによって従来の多層型継続教育の問題点を克服し、アドバイザーの長期的な成長への目処をつけたこと。
3. 今後の課題として、教師および学習者の well-being の観点からの研究という今後の語学学習アドバイジングの発展の方向性も示すことができたこと。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(教育学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成31年2月5日